

## 給食のこと

2021.6.9

野田中学校の給食は、いわゆる自校給食である。1人の栄養士さん（主任栄養技師）と4人の調理員さん（技能主査・調理員）とで、全校生徒と全教職員の給食を毎日毎日提供していただいている。

先日、給食に携わっている皆さんと面談をしたところ、異口同音に「食中毒を絶対に出さない」そして「異物混入を防ぐ」というお話を聞くことができた。ちょっとの油断、少しの油断が危ないというお話をされた方もいた。このような意識の高さがおいしい給食を支えている。

ある方がこんなことを話してくださった。「生徒さんの中には、不登校の生徒さんもいます。そんな生徒さんが学校に来たときに、給食を食べて、おいしいと思ってくれれば、給食を楽しみに学校に足が向くかもしれないと思うんです」この方だけでなく、本校の給食には5人の皆さんの思いが込められている。

上記のお話をしてくださった方は、小学校、中学校と学校が大好きだったそうである。きっと素敵な先生方との出会いがあったのだと思う。いい友人に恵まれたのだと思う。聞くと、中学時代の恩師が野田中学校にいたとのことだった。巡り合わせとはおもしろいものである。という私も、野田中学校の保護者に自分の教え子の皆さんが数人はいらっしゃることを把握している。

栄養士の方は、栄養教諭の資格を持っており、5月から入念な準備をしてきた上で、家庭科の授業をしてくださっている。彼女から我々が学ぶことも多い。視覚に訴える資料を作成していたが、生徒から見えるかどうか、わかりやすいかどうかなど、生徒の目線で考えていた。意外と、我々は自分の都合で資料を作成し、生徒が見えない、読めないにもかかわらず黒板に貼ったりしているものである。学校に限らず、字が小さくて読めないパワーポイントのスライドもよく見かける。

私には給食に対する特別な思いがある。中学校の教頭として南会津の学校に勤務したときは単身赴任だった。当然、1日の栄養摂取における給食の比重は大きくなるはずであった。ところがである。その中学校には、何と給食がなかった。これはかなりのショックであった。私の食生活管理計画はもろくも崩れ去った。

結局、給食を食べることができない生活が7年間も続いた。奥会津の小学校に校長として赴任し、ようやく給食と再会することができた。そこでは、2年間、おいしい自校給食を味わうことができた。このときも単身赴任であったため、助かった。幸せだった。

しかしである。またその後4年間、給食は私の前から姿を消してしまった。給食がないということは、昼食、ランチタイムの楽しみがないということである。給食には、「今日の献立は何かな」という楽しみがある。コンビニで探す昼食には、楽しみはない。

学校生活の楽しみは何ですかと生徒に聞けば、給食が上位にくる生徒もいるかもしれない。部活動が一番の生徒もいるだろう。友達と会えることと答える生徒もいるだろう。教員にとっての理想は、〇〇の授業あるいは学級での生活ではなかろうか。

先生方は、教科の授業、学級経営、学年経営、そして部活動と、様々な教育活動を展開している。その中に、生徒にとっての楽しみ、生徒が待ち望むようなものがあれば理想的である。だが、実際には、給食が先生方の強力なライバルとなっているのかもしれない。校長先生の話や校長通信となると、さらに給食に勝つのは難しい。

給食の上を行きたいところではあるが、朝早くから届けられる食材を5人のチームワークで決められた時間内に調理し、思いを込めて提供するという本校の給食スタッフは、なかなか強敵である。